

平成 21 年 5 月 25 日現在

研究種目： 基盤研究（C）
 研究期間：2007～2008
 課題番号： 19530839
 研究課題名（和文） ナラティブ・ラーニング概念に基づいたアート教育のデザインと教授学習過程論的分析
 研究課題名（英文） Design and analysis of an art education based on the “narrative learning” concept and its teaching learning processes
 研究代表者
 宮崎 清孝（MIYAZAKI, Kiyotaka）
 早稲田大学・人間科学学術院・教授
 研究者番号：90146316

研究成果の概要：

2 年間にわたり、ある幼稚園において、「テーマ」を設定し、「保育者の側の積極的な介入」によって子どもの「想像遊び」を展開することで子どものアート活動を豊かにする保育カリキュラムを、彫刻家、モダンダンスダンサーの参画も得て実施した。子どもの想像遊びが現実世界の情報探索と不可分であること、それらがアート活動の資源となることが確かめられた。子どもの学習にとって大人の学習が重要であることが示唆された。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2008 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：認知心理学・教授学習過程論

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：各教科の教育（図画工作）カリキュラム構成・開発、アート教育、協働的学習、教師の学習、アクション・リサーチ

1. 研究開始当初の背景

アート教育はそれが多くの論者によって子どもの発達にとって重要なものであると説かれながらも、日本内外を問わず教育の中での位置を低下させ続けている。このことの学問的な理由の一つは、アート教育、及びアート経験が子どもにどんな学習をひき起こすのかという問題が実証的に、そして実証を踏まえた理論によって、明確になっておらず、したがって説得力のあるアート教育擁護論ができないということにある。

このような観点から、研究代表者はアート教育について幼稚園の現場でアクション・リサーチ的な研究をこのところ続けてきた。とりわけ平成 17・18 年度には科学研究費基盤 (C) 17530673「アート教育の教授学習過程論

敵分析：「協働的想像」としての演劇教育のデザイン」において Sweden の Lindqvist, Finland の Hakkarainen などによって研究されてきた narrative learning という想像遊びを中心に据えた幼稚園教育の方法について検討した。

2 年間の試みにより、この方法が可能であり、子どもたちのアート制作に影響を与えることが明らかになった。同時に、いろいろな論点が生じてきた。そこで、この方法をさらに発展させ、またそれら論点を明確にしていくため、本研究を計画、実施した。

2. 研究の目的

narrative learning という方法は、「大人の側の積極的な介入によって」「子どもの想像

遊びを展開し、その中にアート活動を位置づけることで活発なアート経験を期待する、というものである。平成 17,18 両年度の研究の中でその方法を吟味する中で出てきた次のような諸論点が、今回の研究で特に目的とするところである。

(1)「想像遊び」の性格を明確にする：たとえばVygotskyなどによって創造とは現実と無関係のファンタジーではなく、現実認識を踏まえたものであることが説かれているが、ここでも「想像遊び」が現実世界からの情報探索活動を引き起こし、かつそれから情報を得ていくこと、またアート経験については、想像と現実認識の双方が重要であり、本方法で絵得られるアート経験の豊かさの一つが、この2つの資源の豊かさによることが示唆されてきた。この点についてより明確にしていることが、本研究の焦点の一つである。

(2)保育方法の探求：もともとHakkarainenたちが想定したnarrative learningにおけるnarrative作りは、せいぜい1ヶ月程度のスパンでおこなわれるものであり、特定の「物語」を作り、それを学習機会とする、という発想である。しかし、これは1年間にわたるカリキュラム構成のための方法としては不適切である。前研究においてここから出てきた解決案が、抽象的なテーマを設定し、そのテーマに関わるいろいろなnarrativeを、たくさん作り出していく、というやり方であった。このやり方のfeasibilityについてさらに検討し、可能性を確定していくことが、本研究の焦点の一つである。

(3)大人の側の学習の契機を位置づける：これを強調することで、本研究は日本内外での幼児教育の主流的な考えである「自由保育」論と大きく異なる。だが大人は、大人であるというだけでは、子どもとともに想像を展開したり、学習を促進したりすることができない。大人が、題材について学習し、興味を持つことが重要である。このことは前回の研究から示唆されたことであると同時に、日本の初等教育の中でたとえば斎藤喜博などによって「教材解釈」の重要性として論じられていたことでもある。そこで本研究では、この学習プロジェクトへの保育者の参加が、大人としての保育者の学習でもあるという観点を打ち出すことを試みる。

さらにこれに関連して、本プロジェクトでは大人として保育者以外に、夏季のワークショップを中心として各ジャンルのアーティストが参加してくる。アーティストと保育者という、異なる志向を持つ大人の間での学び合いの様相も、アートと教育の間関係を見ている際の重要な資料となると考えた。

3. 研究の方法

本研究は全体としてアクション・リサーチであり、データ収集の方法としてはビデオデータを用いた参加観察である。またデータの分析としては作品の変形分析、参加者の行為の分析、談話の分析を用い、できてきた結果ではなく、変化していく過程に注目する。

アクション・リサーチとして、本研究は一幼稚園と協力して、その幼稚園の年長児を中心とする年間カリキュラムを設計・実施し、その結果をさらに次年度以降に反映させていく方法をとる。カリキュラムの主要構成要素は、まず年間を通しての保育活動の発想の中心となる「テーマ」である。このテーマの設定法自体、研究の対象の一部である。

さらに夏にはプロのアーティストを招き、夏季ワークショップをおこなう。ただしプロジェクトの進展の結果、今回の研究では夏以前にも来園し、準備的なワークショップをおこなった。これらのワークショップに対して、それ以前の通常保育がどういう影響を与えるのか、逆にそれ以降の通常保育がどういう影響を与えるのか、ということが、本研究の重要な資料となる。

もう一つ、10月以降に、園の通常保育の一環として、2月まで継続するアートの時間がある。これは子どもたちにとってはそれまでの幼稚園生活のまとめとなる活動であるが、本研究にとってもそれまでの諸活動がそこでのアート活動に同影響を与えるのかを見ることができると、重要な資料となる。

4. 研究成果

(1) 平成 19 年度研究の主要な結果

年間テーマは「地球・土・宇宙」である。招聘アーティストは林武史（彫刻家・東京藝術大学）であり、氏の提案で夏季ワークショップは「泥煉瓦の山」を作り、「夜その上に登って、月に吠える」ことになった。

テーマに関する保育者側の働きかけの特徴：今回は子どもの想像遊びの最初のきっかけとして「隕石が落ちた」という事件を、大人側が用意した。子どもたちの以下の遊び活動には、隕石、石のモチーフが多く採り入れられた。さらに、保育者側の働きかけにより、それが「迷子の宇宙人」というモチーフへと発展し、遊び、アートの様々な活動への資源となった。

また、9月に、子どもたちの中に国旗への関心が生まれた。これは直接テーマと関係していなかったが、保育者はその関心を育てた。これは様々な国への空飛ぶ絨毯での飛行、という遊びになっていったが、結果的に行き先には宇宙や宇宙人が出てきて、テーマに関する想像遊びを拡げることになった。テーマに

一見関係ない子どもからの発想の、潜在的なテーマとの関係性を発見できたことが、子どもの自主的な活動をさらに豊かにするための鍵となっており、保育者に必要な知識の一つの重要な側面を示唆している。

子どもの情報探索活動：テーマのもとでの保育者の働きかけと、想像遊びの進展を通して、子どもたちは宇宙に関係する多くの図鑑、さらにはいろいろな国について図鑑などを学習し、それを想像遊び、アート活動の資源とすることができた。ただ、今回学習対象は図鑑など、文化的資源が主たるものであった。

夏季ワークショップでの子どもたちの活動：泥の山を作るという園としての大きな活動を背景として、子どもたちはアート専門家の活動に刺激されて自分の活動を開始したり、あるいは自らの開始した活動を大人たちに認めてもらい、援助してもらうことで拡大していく活動に参加することができた。

10月以降のアートの時間におけるアート活動の特徴：作品制作に際して子どもたちの選んだモチーフには、テーマ関係のものが多かった。典型的には想像遊びの中から生まれてきた「宇宙人」、子どもたちが図鑑などで情報収集した「星雲」「星」などである。ただし、夏のワークショップで制作した泥の山は、その後の遊びのサイトとなったにもかかわらず、直接的にモチーフに選ばれることがなかった。

(2) 平成 20 年度研究の主要な結果

年間テーマは「森と海」である。招聘アーティストは上村なおか（モダンダンス・桜美林大学非常勤講師）であり、夏季ワークショップでは子どもたちがダンスを創り、親たちの前で踊った。なお、方法における大きな変化として、平成 19 年度の結果を受け、この年度ではそれまで用意していた、想像遊びの最初のきっかけとしての全園的な「事件」を特に用意しなかった。

テーマに関する保育者側の働きかけの特徴：昨年度と異なり、今年度は想像遊びの最初のきっかけとしての事件を、特に用意しなかった。最初の事件は、narrative learning が 1,2 ヶ月のスパンである特定の物語を展開するという形式でおこなわれている場合には意味がある。しかし年間を通して抽象的なテーマがあり、そこからその時々子どもたちと保育者が協働的に様々な物語を作り出していく方式にはなじまないと考えられた。結果として、そのような事件の用意なしに、各クラスともに、それぞれの想像遊びの世界を展開することができた。

その際、テーマの具体化の手がかりとなったのは、対象としたクラスの場合、保育者の個人的な興味、知識のある川魚の世界であった。一見子どもに対する大人の興味関心の押しつけのように思われるが、実際にはその逆であり、子どもたちは前年度以上に想像世界の中に没入し、川を中心にした想像の世界が継続的に 1 年間展開した。このことは、カナダの教育学者 Egan のいう、教育者・保育者自身の教材、遊びの対象との“感情的な関わり”が、子どもに介入するとき重要であることを示唆している。

アーティストと保育者の関わりについて：教育・保育の専門家である保育者と、アートの専門家であるアーティストが協働でワークショップをおこない、しかも前者が後者に「おまかせ」にしないとき、両者の間にはいろいろな緊張が生じる。今回、子どもたちにワークショップ参加のダンサーたちをどう説明するか、という点を巡り、その問題がはっきりと出た。子供に向けて保育者がダンサーたちを「神様」と表現していたことについて、ダンサーたちから抵抗が示された。そのことで、両者は長い話し合いの時間を持つことになった。両者の間の葛藤が、どう解決されるか、ということよりも、重要なのは葛藤が両者の間にそれぞれの自らの立場の明確化を推し進める契機になる、ということが示唆された。

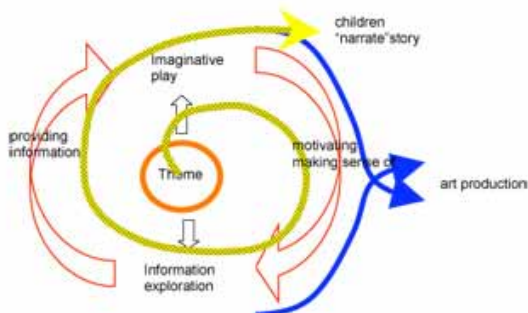
10月以降のアートの時間におけるアート活動の特徴：子どもたちが選んだモチーフには、魚など、テーマを展開していく中で想像遊びや、それに関連する情報収集活動から得られた資源が現れてきていた。ただし、今年度も、ワークショップそれ自体の思い出は出現しない。むしろ、作品製作時により近い時期におこなわれた遠足での経験が多く採り入れられており、遠足が現実世界からの情報収集活動の一つとなっていることを示している。

夏季ワークショップでの子どもたちの活動：上村のダンスはコンテンポラリーであり、ある振付を踊るのではなく、世界の中での自らの身体を感じ取るうとする面が強い。一見、子どもにはきわめて困難である。しかし、身体でお互いに触りあってみるとか、川の流れて感じてみるといった課題を、子どもたちは真剣におこなっていた。ただ、その経験が子どもたちにどのような学習を可能にするのか、という点については、さらなる検討が必要である。

(3) 研究年度全体を通しての考察

両年度を通して、「テーマ」を中心とし「保

育者の側の積極的な介入によって、「子どもの想像遊びを展開し」「現実世界からの情報収集を活発化し」双方からの影響によって子どものアート活動を豊かにする保育カリキュラムの基本的な形態の有効性は明らかになった。それを模式化すると、おおよそ以下のような図となる。



いずれの年度も、テーマのもとで展開した想像遊びは関連する現実世界からの情報探索活動と密接に関連していた。保育者たちの準備した図鑑、絵本などの文化的資源、さらには園庭などの自然的資源に対して、想像遊びは多くの情報探索活動の機会を創り出し、またそこで得られた情報が想像遊びをさらに豊かにした。

さらに想像遊びの中で生まれた情報、また現実世界からの情報探索活動の結果として得られた各種情報が、学年後半におこなわれた自由課題のもとでのアート制作に資源として採り入れられた。しかも、いずれも大人側から見れば中心的なトピックである夏季のワークショップでの経験が、そのアート作成の資源とはなっていない。経験自体は子どもにとって印象的なものであることは明らかであり、ここに子どもなりの自発的な資源利用の選択がおこなわれているように思われる。

抽象的なテーマを用意し、その時々で様々な想像遊びを展開しようとする試みは両年度を通じ成功した。ある想像遊びの中に別の話題が入って自ずと変わっていったり、あるいはまったく独立に生じていた想像遊びが前の想像遊びと後でつながるといった展開があった。1年間という長いスパンでまったく異なる主題をもった想像遊びがばらばらにおこるのではなく、一見異なる中に関連と発展が認められた。これは、抽象的なテーマを設けるとする方法の保育カリキュラム作りについての価値を示すものだと思う。

ここで特に大人の側の働きかけについて、平成19年度に、それまで子どもの想像遊びを開始するきっかけとしていた事件を導入せず、しかも子どもの想像遊びが平成19年

度以上に展開していることが重要である。この保育カリキュラムの最初の発想は演劇に基づいており、そこから一つの大きな物語の流れを創り出すために最初の全園的な事件が必要とされたのだが、それは必要ないことが明らかになった。

これは逆から見ると、各クラスの保育者が日々の活動の中からテーマと関係づけた保育を開始することができたということであり、保育者の保育創造の技能にとって何が重要であるのかが、そこに示されている。平成19年度の事例では、保育者が子どもから出た活動を、それが一見テーマと関係ないように見える場合でも、テーマとつながりうることを洞察し得た。また平成20年度の事例では、保育者自身が個人的に“感情的に関わる”ことができる話題を選択したことが重要であった。これらは、日本の教育界では「教材解釈」といわれている仕事である。「教師・保育者が学ぶからこそ、子どもも学ぶ」ということであり、これは子どもの学習論において、日本国内外を問わず、これまで明確な形では指摘されていない、重要な理論的提起になる。

ただし、教材解釈は一般的には小学校以後の、現実認識のみが関わる学習についていわれることである。本研究は、それが幼稚園における想像遊びを大人と子どもがともにする場面でも関係することを強く示唆している。しかしその点について実証的にはまだ十分ではなく、重要な問いとして今後の研究に残されている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2件)

- 1, 宮崎清孝 2008 児童の学から子どもと教師の共・発達論へ。こども総合研究(大妻女子大学家政学部児童学科).1. 18-25. 査読なし
- 2, 佐藤公治, 内田伸子, 茂呂雄二, 郡司明子, 森實祐里, 宮崎清孝, 佐伯胖, 西野範夫, 奥村高明 2008, 研究委員会シンポジウム1・アート教育の可能性を拓くー芸術教科の授業削減計画再考. 教育心理学年報, 47, 33-36. 査読なし

〔学会発表〕(計 8件)

- 1, 宮崎清孝, 上村なおか, 佐木みどり, 東村知子 2009 アーティストと保育者の協働を探る-対立と学びの契機. 日本発達心理学会第20回大会, 2009年3月25日, 日本女子大学. 東京.
- 2, Miyazaki, K. 2008 Re-encountering with the culture: Teacher's work to produce

fruitful inquiry learning. 関西大学人間活動研究センター 第5回国際シンポジウム New challenges to interventionist research on educational change. 2008年12月6日 関西大学東京センター .

3, Miyazaki, K. 2008 Teacher as proto-learner: A Japanese view on teacher s construction of zone of proximal development. Paper presented at the 2nd Conference of the International Society of Culture and Activity Research. San Diego. 査読あり . 2008年9月11日 .

4, Miyazaki, K. 2008 Children s play and the imagination in art production. Paper presented at the 2nd Conference of the International Society of Culture and Activity Research. San Diego. 査読あり . 2008年9月11日 .

4, Miyazaki, K. 2008 Imagination as collaborative exploration: Art education in Saitou pedagogy. Paper presented at the 3rd annual research symposium on imagination and education. Vancouver. 査読あり . 2008年7月9日 . http://dev.papers.ierg.net/index.php?table=papers&conference_id=16&-action=browse&-cursor=4&-skip=0&-limit=30&-mode=list

5, 宮崎清孝 2008 幼児のアート活動における想像遊びの働き 日本発達心理学会第19回大会 . 2008年3月19日 . 追手門学院大学・大阪

6, 宮崎清孝・佐木彩水・林武史・佐木みどり・東村知子 保育におけるアートの可能性を探る・ナラティブとしての保育の中で . 日本発達心理学会第19回大会 . 2008年3月19日 . 追手門学院大学・大阪

7, 佐藤公治・内田伸子・茂呂雄二・宮崎清孝・郡司明子・森實祐里・佐伯胖・西野範夫・奥村高明 アート教育の可能性を拓く: 芸術系教科の授業削減計画再考 日本教育心理学会第49回大会 . 2007年9月16日 , 文教大学 埼玉

8, Miyazaki, K. Teacher as the imaginative learner: Egan, Saitou, and Bakhtin. Proceedings to the 2nd annual research symposium on imagination and education. 査読あり 2007年7月20日 30-39, Vancouver. http://dev.papers.ierg.net/index.php?table=papers&conference_id=5&-action=browse&-cursor=7&-skip=0&-limit=30&-mode=list

6 . 研究組織

(1)研究代表者

宮崎 清孝 (MIYAZAKI KIYOTAKA)
早稲田大学・人間科学学術院・教授
研究者番号 : 90146316

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし